

国際基督教大学図書館における目録利用行動

—インタビュー調査—

Information-seeking Behavior of Catalog Users in the Library
of International Christian University

—A study of the catalog use by interview—

三浦逸雄

Itsuo Miura

椎葉徹子

Motoko Shiiba

津久井甲

Kinoe Tsukui

阪田蓉子

Yoko Sakata

多田恵子

Keiko Tada

Résumé

This paper, first, reviews briefly major catalog use studies with attention given to objectives and methods, and then presents the survey of catalog use at the ICU Library.

Utilization of the card catalog in the library was studied during the four days from June 12 to 15, 1978. The study was motivated by an interest in improving the existing catalog performance and helping in the design of a computerized catalog. The schedule of the interview was decided on the volume of traffic in the catalog area observed by hour each day. Catalog users were approached and interviewed immediately after they completed their catalog searches. More than 250 interviews were conducted.

Information was sought regarding the clues they used to begin their searches, the processes actually used and their statuses at the university. Follow-up studies were made to examine the match between user's clues and catalog card data; then the success or failure of the search was determined.

In terms of immediate intent, 48.0 percent of the searches were known-item searches, 44.8 percent were subject searches, 7.1 percent were selective searches and 0.4 percent were biblio-

三浦逸雄：東京大学大学院教育学研究科博士課程

Itsuo Miura, Ph.D. Course, Graduate School of Education, University of Tokyo.

阪田蓉子：国際基督教大学図書館

Yoko Sakata, International Christian University Library.

椎葉徹子：東京女子大学短期大学部図書館

Motoko Shiiba, Junior College Library, Tokyo Woman's Christian University.

多田恵子：国際基督教大学図書館

Keiko Tada, International Christian University Library.

津久井甲：国際基督教大学図書館

Kinoe Tsukui, International Christian University Library.

graphic searches. Significant variations in search objectives and search patterns were detected with respect to the type of catalog user. In this study, of those involved in known-item searches, 58.7 percent succeeded in locating the desired material and its call number. Of the fifty unsuccessful searches, thirty two failed because desired books were not in the collection, and fifteen failed because the user did not use all of the clues available to him or the searchers' information was incorrect or incomplete. The principle approaches by which searchers attempted to use the catalog for known-item search were: author, 42.4 percent; title, 57 percent; subject, 1.6 percent.

Of those engaged in subject searches, 63.3 percent determined particular books related to the specific subject at the catalog, and 32 percent looked for the classification number of the subject as a guide for browsing through the books on the shelf. About half of query terms generated by the user did not match subject entries in the catalog.

Other results including failed searches are presented and discussed.

- I. 序
- II. 目録利用に関する先行調査の概観
 - A. 調査目的
 - B. 調査方法
- III. インタビュー調査
 - A. 調査の概要
 - B. 調査結果
- IV. 結語
- 付録：質問票

I. 序

図書館の目録は蔵書にアクセスするための主要なツールのひとつであり、しばしば唯一のツールでさえある。また、ある意味では、目録は利用者と図書館員が交差する場であるともいえる。すなわち、目録は利用者が様々な種類の探索を始めるところであり、一方、それは蔵書の利用に必要な情報を組織する図書館員の日々の仕事の蓄積でもある。

このような目録の基本的な機能は、Lancaster¹⁸⁾の挙げている次の点に集約されよう。

- (1) 既知文献所蔵の有無とその配架位置を指示すること。
- (2) 特定主題についての所蔵文献とその配架位置を指示すること。
- (3) シリーズ物の所蔵内容を知らせること。
- (4) 書誌的情報を提供すること。

目録作成者は上記の機能を持つ目録が利用者のニーズを充たしているか、もし充たしていなければ、どのような問題があるのかといった目録のパフォーマンスに当然関心を示し、より有効な目録を編成しようと努力している。また、図書館管理者にしても、目録のパフォーマンス（つまり、利用者にとっての便益）もさる事ながら、特に目録作成・維持のコスト面に多大の関心を寄せている。いずれにせよ、内容と形態の両面において適切な目録を提供するためには、利用者の目録利用に関するあらゆる側面のデータが不可欠なものとなる。このような理由から目録利用調査の必要性が認められるのである。

残念なことに、わが国において、これまでに報告されている目録利用調査の件数はきわめて少なく、しかもその方法に問題のあるものが多くみられる。一方、アメリカやイギリスでは、Frarey,¹¹⁾ Palmer,²⁹⁾ Krikelas,¹⁷⁾ Lancaster,¹⁸⁾ Lipetz,²¹⁾ Hafter¹²⁾ による網羅的あるいは選択的レビューにみられるように、今日まで種々々

な目録利用調査が数多く実施され、目録利用に関する客観的データが蓄積されている。とりわけアメリカの調査は、その件数だけでなく、調査の規模や方法の点においても他を圧倒している。

こうした事情を考慮し、今回、国際基督教大学 (ICU) 図書館におけるアンケートとインタビューによる2つの調査を設計するにあたって、主にアメリカの先行調査を参考にした。そこで、本稿では、最初にアメリカを中心とする先行調査を、その目的と方法に焦点をあて簡単に概観し、次に ICU インタビュー調査の結果を報告する。なお、アンケート調査については別の機会に譲りたい。

II. 目録利用に関する先行調査の概観

——目的と方法を中心に——

1930年のアメリカ図書館協会 (以下、ALA と略す) ロサンゼルス大会の目録部会で、Randall が組織的な利用者研究の必要性を訴えてから、³⁰⁾ アメリカでは今日まで数多くの調査が積み重ねられてきた。例えば、1972年の Krikelas のレビュー¹⁷⁾ には1931年の Akers による調査¹⁾ から1968-69年のミシガン大学図書館調査^{35), 36)} まで総計54件 (イギリスの調査1件を含む) が列挙されている。

1930年以降の目録利用調査を通観してみると、1955-56年のALA調査²⁾ が規模と内容の点できわだっており、それまでの調査とは明確に段階を画すものである。このALA調査以後、規模、方法、分析のいずれの面においてもすぐれている調査が、アメリカとイギリスで1960年代末から1970年代初めにかけていくつか集中している。わが国の場合も、われわれの目にふれた限りでは1967年の神戸市立図書館の調査¹⁵⁾ 以外はすべて70年以降に実施されている。しかしながら、わが国の調査はあらゆる点において60年代末から70年代初めのアメリカとイギリスの調査に遠く及ばない。

A. 調査目的

明確な目的を設定していない調査がこれまで多くみられるが、図書館が目録利用調査を通して目録を評価し、目録利用者のニーズを把握しようとする一般的な理由は、Lipetz³¹⁾ の指摘のように、主として次の3点に要約されよう。

- (1) 図書館利用者に適切なサービス (つまり蔵書へのアクセス) を提供できる方法を知ること。
- (2) 様々な潜在利用者にサービスしたり、そのニーズを充たし得る方法を知ること。

- (3) 意図したサービスに寄与していない無駄な労力や費用の節約を可能にする方法を知ること。

以上のような一般的な目的の他に、これまでの調査から、より具体的な目的を拾いあげると次のようなものがある。

- (1) 全国的規模で各種図書館の目録利用実態を明らかにし、その結果を目録編成方針の参考とすること。^{2), 22), 23)}
- (2) 目録カード上の記載項目の利用を調べて、記述の簡略化の可能性を探ること。^{1), 4), 26)}
- (3) 利用者に及ぼす影響を最小限にとどめて、閲覧目録から削除できる記入のタイプを明らかにすること。³³⁾
- (4) 利用者の探索語と目録の件名標目との適合を調べ、件名標目の適切さを検討すること。^{9), 16)}
- (5) 閲覧目録の効果を減ずることなく、目録作業の時間とコストを節約するために、件名目録作業の省力化の可能性を確かめること。^{24), 25)}
- (6) 件名目録の探索結果と利用者の主題知識および件名標目システムの知識との相関を究明すること。⁷⁾
- (7) 目録探索の不成功 (失敗) を解明し、その情報を図書館にフィードバックする方法を開発すること。³²⁾
- (8) 目録の標目についての討議のための参考データを収集すること。³⁾
- (9) 利用者の持っている著者情報および書名情報の精度と探索結果との関連を究明すること。⁶⁾
- (10) 目録探索の効率に影響を与える要因を明らかにすること。⁵⁾
- (11) 目録設計の参考資料とするために、探索の手がかりとして利用者が記憶している文献の特徴を調べること。^{10), 34), 37)}
- (12) 機械可読書誌ファイルに基づく目録を作成するため利用者のニーズや探索プロセスに関するデータを収集すること。^{8), 19), 20), 29), 35), 36)}

以上、レベルの異なる目的を便宜的に列記しただけであるが、いずれの調査においても、かかげている目的は単純なものではなく、いくつかの関心が絡み合っている。

特に、1960年代の後半以降に行われた調査の大半は、その目的において何らかのかたちで目録業務の機械化とかかわりを持っている。ただし、わが国においては機械化を目的にかかげた調査、あるいはそれを意識した調査は、われわれの目にふれた限りでは皆無である。前述したように、60年代末から70年代初めにかけて重要な調

査が集中したことの背景には次の2つの現状認識があったことは明らかである。ひとつは目録作成・維持コスト(労働コスト、スペース・コスト)の急騰であり、もうひとつは技術革新、すなわち、目録分野へのコンピュータ導入が、その性能の向上とコストの低下に伴って可能になったことである。

上述のように調査の目的や関心は多様であるが、全般的にみて主として次の側面に関する情報が収集され、分析されている。

- (1) 目録利用者の構成
- (2) 目録利用の目的
- (3) 目録へのアプローチあるいは探索のタイプ
- (4) 探索プロセスあるいは戦略
- (5) 探索の成果(成功・失敗)
- (6) 目録カード上の記載項目の利用

このような側面に関しての客観的データは、将来の目録編成方針の決定にあたって重要な資料を提供することは間違いない。しかし、費用/便益分析の観点からすると、目録利用調査は便益の面にかかわるものである。従って、合理的な根拠に基づいて方針を決めるにはもうひとつの面であるコストについての情報を必要とする。これは利用調査とは別の業務分析や時間分析によらなければならない。

B. 調査方法

アメリカを中心にこれまで数多くの利用調査が試みられてきたとはいえ、科学的な調査という点からみれば、その数はきわめて限られてしまう。

信頼できる調査を行うためには、まず第一に統計的に厳格な標本抽出が不可欠となる。大部分の図書館では調査対象となる目録利用者あるいは目録利用が多すぎて、費用や労力の面から全数調査はたいへん困難であろう。このことは、特に大規模な大学図書館や研究図書館にあてはまる。それ故、調査は一定期間における利用者の標本に依存しなければならない。この場合、標本抽出の方法が統計的に妥当なものでなければ、その標本は利用者あるいは利用全体(つまり母集団)を代表するものではなく、調査結果は偏ったものになる。

従来の調査には母集団の定義が明確でなく、その標本抽出の方法も不適切あるいは不明瞭なものが多くみられる。例えば、質問紙を目録の側に置いて、探索が不成功に終わった利用者に協力を求めたイギリスの調査³²⁾では、その低い協力率から考えて、質問紙に記入した人としなかった人との関連が見きわめられないかぎり、協力者を

探索に失敗した利用者全体の代表とみなすことはできない。同様のことは1978年の岡田による調査^{27),28)}にも指摘できよう。標本抽出の方法において最もすぐれている調査は、Palmer による ミシガン大学図書館調査²⁹⁾と Lipetz による エール大学図書館調査^{19),20)}の2件である。両調査は予め目録利用量を測定し、その結果から調査実施期間の利用量(つまり母集団)を算定し、それに基づいて無作為に標本を抽出する調査を設計している。

標本抽出の方法とともに、調査の期間が調査結果の信頼性に大きな影響を与える。先行調査をみると、調査期間は3日間、³⁾5日間、⁸⁾1週間²⁷⁾と比較的短期間のものから、1年間^{19),35)}にわたる長期のものまで色々である。期間の短い調査、例えば平日の午前中、夏休み中、試験前の1週間、あるいは数時間だけといった調査は、1日の時間帯、1週間の曜日、1年間の季節による目録利用の変動を把握した上で、調査結果を判断しなければならない。実際、このような慎重な手順を踏んでいる調査はきわめて少ない。

調査にあたっては標本として抽出された利用者から正確で信用できる情報を集めなくてはならないが、そのためには利用者の行動や判断を歪めないような配慮が必要である。この点で最も適切な方法は目録利用の行動を利用者に気づかれずに観察すること、もしくは利用者が図書館に残していった記録(例えば、図書請求票とか貸出し記録)を用いることであろう。われわれの検討した限りでは、観察だけにに基づいた調査はひとつもなく、請求票を用いた調査^{6),14),15)}や貸出し記録による調査³⁶⁾が若干みられるにすぎない。このような調査は利用者の行動や判断に影響を与えない点においてはすぐれているが、利用者が実際に探していたもの、探索の目的、利用者の持っていた情報、探索のプロセスなどに関しては何ら知ることができないという欠点を持っている。

利用者から詳しい情報を引き出すには利用者に直接質問しなければならない。それには質問紙とインタビューの2つの方法があり、実際、この2つが先行調査で用いられた主要な方法である。質問紙を郵送したり、手渡しで配ったりする方法は、Palmer によるミシガン大学調査²⁹⁾のように88%という高い回収率を示す場合もあるが、概して低い回収率にとどまり、調査の有効性が危くなることが多い。また、実際の目録利用時点で質問紙の記入を依頼する調査^{29),32)}は別にして、利用者のこれまでの利用経験を尋ねる調査の場合、^{27),28)}人間の記憶は往々にしてあてにならないことがあり、その上、回答者自

身の解釈が入り込む可能性も考えられるので、回答が不正確で歪められたものになる危険がある。このことは、イギリス図書館協会（以下、LA と略す）の調査^{22), 23)} のようにインタビューを用いた場合にも言える。

個々の目録利用について正確で詳しい情報を得るには、目録利用時点でのインタビューが最も適切な方法である。アメリカやイギリスの調査の大半はインタビュー方式を採用している。特に、ユール大学調査^{19), 20)} や Tagliacozzo 等のミシガン大学調査^{35), 36)} では、目録利用の前後、あるいはその間に数回のインタビューを試み、探索プロセスについて詳細な情報を集めている。わが国では、インタビューによる目録利用調査として藤井による小規模な調査¹⁹⁾ が挙げられるにすぎない。

インタビュー調査といっても自由なインタビューはほとんどみられず、大部分が予め用意された質問票に沿ったインタビューを行っている。質問票は簡略なカード形式²⁶⁾ や自由記述的なもの^{35), 36)} から、既知文献探索 (known item search) や主題探索 (subject search) といった探索タイプ別の詳細なもの¹⁹⁾ まで様々である。インタビューと質問票を併用することのひとつの理由は、複数の調査スタッフによるインタビューに一貫性を保証することである。とはいえ、インタビュアーの訓練が十分でなかったり、調査内容の理解が欠けているような場合には、誘導的な質問をしたり、回答を勝手に解釈したりしてデータを歪めてしまう危険性も考えられる。この点に十分な配慮をしている調査もこれまで数えるほどしかない。例えば、LA の調査^{22), 23)} では、インタビュアーに前もって注意書を与えたり、多項選択肢の質問の場合には利用者毎に提示の順番を変える工夫など細かな配慮を行っている。また、ユール大学調査¹⁹⁾ では、インタビュアー自身にインタビューの相手を決めさせず、前もって決めてあるランダムな順番で相手を指示し、更に誘導的な口調にならないように注意を払っている。一方、同一の質問紙を用いているとはいえ、調査対象である複数の図書館で用いられた調査方法が、インタビューであったり、受付での配布であったりして、まったく不統一な調査³⁾ もみられる。このような調査の場合、当然、調査方法の相違による偏りが結果に表われてくるであろう。

調査方法の分け方として考えられるもうひとつの基準は、コントロールされていない自然な状況、つまり実際の図書館における調査とコントロールされた実験状況における調査である。Lipetz²¹⁾ の言葉を借りれば、“生体内 (in vivo)” と “試験管内 (in vitro)” の調査である。

先行調査の大部分は前者に分類されるものであり、後者の調査としてシカゴ大学図書館学大学院による一連の実験的調査^{5), 10), 34), 37)} と最近の Bates による件名目録の調査⁷⁾ の2件を数えるにすぎない。

調査の目的によって収集データの内容や分析方法は異なっている。目録利用量を利用者グループ別に測定したり、著者・書名・主題の3つのアプローチの比率を算定したり、目録カード上の記載項目の利用率を調べたりする単純な量的調査、つまり目録のマクロ評価を試みている調査は数多くみられる。一方、利用者の持っている著者・書名情報の精度と探索結果との相関を究明したり、探索失敗の原因を追跡調査によって明らかにしたり、主題探索における利用者の探索語と件名標目との適合度を分析したりする質的評価を含む調査、つまりミクロ評価を試みている調査はそれほど多くない。1955-56年のALA調査²⁾ にはミクロ評価の要素が多少取り入れられているが、この種の評価の本格的な試みは、やはり60年代末から70年代初めにかけてのミシガン大学^{35), 36)}、ユール大学¹⁹⁾、イギリス4大学³²⁾ の各調査においてである。本稿で報告するICUインタビュー調査はミクロ評価を目指したものであり、上記の4つの調査、とりわけユール大学調査から強い影響を受けている。

III. インタビュー調査

A. 調査の概要

1. 調査の目的

現在、図書館の目録は変革期を迎えている。すなわち書誌情報のコンピュータ処理が可能になって以来、書誌記述の標準化、目録形態の多様化、目録作業の変化等、目録を取り巻く状況は大きく変化しつつある。しかしいかなる状況にあっても、効果的な目録を提供するためには、利用者の探索行動を知る必要がある。これまでわが国では、目録作成の技術に関しては幾多の議論が積み重ねられてきたが、目録利用の面にはあまり注意が向けられてこなかった。中でも目録利用行動の調査はほとんど試みられていない。

本調査では、これまで欠けていた領域、特に探索のタイプ、プロセス、結果の解明に重点を置き、アンケート調査では把握し得ない側面の調査を試み、その結果を目録編成およびその他の図書館サービスの改善に資することを意図した。

2. 調査時期

1978年6月12日(月)―15日(木)

3. 調査対象

ICU 図書館閲覧目録（和洋混排による辞書体目録）の利用者。ただし、図書館職員は除く。

4. 調査項目

- (1) 目録利用者の属性（身分、学年・勤続年数、専攻、日常使用語、性別）
- (2) 図書館および閲覧目録の利用状況（利用頻度、目録の印象）
- (3) 探索の目的
- (4) 探索のタイプ
 - a. 既知文献探索
 - b. 主題探索
 - c. 書誌的探索
 - d. 選択的探索
- (5) 探索の結果
- (6) 探索不成功の分析
 - a. 不成功の原因
 - b. 不成功後の行動
- (7) その他
 - a. 被探索文献
 - b. 要望・意見

5. 調査方法

調査スタッフおよび学生スタッフによるインタビュー。

6. 調査の実施経過

a) インタビューの方法

利用者の目録利用行動を客観的に把握するために、目録利用の終了時点で利用者に、予め用意した質問票に従って口頭で質問し、探索内容を聴取し、記入する方法を採用した。

当初、探索行動についての、情報を正確に記録できるように、目録を利用する直前に、利用目的、探索文献についての情報、探索に使用しようとしている手がかり等を尋ねる1回目のインタビューを行い、更に探索終了後に、探索のプロセスおよび結果についての2回目のインタビューを試みることを計画した。これは探索終了時点におけるインタビューだけでは、探索開始前に利用者の持っていた情報が探索プロセスの中で意識的もしくは無意識的に修正あるいは歪曲されたかどうか判断できないと考えたからである。しかしながら、實際上、探索の前後にインタビューを行うことは、利用者にとって煩わしいものであり、場合によっては不快感を与えることも予測され、また、利用者が調査を意識して、通常とは異なる

行動をとるといった危惧もあるので、結局、インタビューは探索終了時点での1回だけに限ることに決めた。

b) 質問票の作成

探索のタイプ、プロセス、不成功についての情報収集を中心に質問票を設計した。

従来の調査では、探索のタイプを利用者の手がかり（著者名、書名、件名）によってカテゴリー分けする方法がよく見受けられるが、このような分け方には探索の意図や目的が考慮されておらず、適切なものとはいえない。そこで、探索意図・目的を踏まえた次の4つの探索タイプを設定した。

- (1) 既知文献探索——利用者が既にその存在を知っている特定の文献の所蔵または（および）その配架位置を知るための探索。
- (2) 主題探索——特定の主題に関する文献を求め、図書館が適切な文献を所蔵していれば、その配架位置を知るための探索。
- (3) 書誌的探索——特定文献そのものを利用するのではなく、その書誌的事項を目録カードによって確認するための探索。
- (4) 選択的探索——特定の著者名または叢書名等から図書館所蔵の文献を確認し、その中から必要とする文献を選択するための探索。

探索のプロセスに関しては、既知文献、書誌的、選択的探索の場合には特にアプローチに焦点をあて、主題探索の場合には探索語および探索戦略に重点を置いた。更に不成功に終わった探索については、後から追跡調査をするために、出来るだけ詳しい情報をひき出せるように質問票を設計した。

c) 調査時期の決定

インタビュー調査には、アンケート調査の実施期間（5月22日—6月12日）に続く1週間（6月12日—17日）を予定した。この時期に決定した主な理由は次の4点である。

- (1) エール大学調査¹⁹⁾では目録利用量と貸出利用量は、ほぼ比例関係にあるという結果が出ている。このことはこれまでの経験からみて ICU にもあてはまると考えた。そこで、1977年4月—1978年3月の一年間の貸出統計から月別の貸出冊数の推移、および同じ一年間の参考質問件数の推移を調べた結果、6月は平均的な月であることを確認した。
- (2) 図書館の利用に影響を与える特別な行事であるキリスト教週間（6月5日—10日）を避けた。

(3) 試験の直前には図書館の利用が増えるので、期末試験（6月23日—28日）の直前を回避した。

(4) アンケート調査と重ならないように時期をずらした。

d) 予備調査

質問票の草稿を用いて、被調査者の協力度、探索タイプの適切さ、質問の構成、ワーディング、インタビュー技術などに留意し、5月下旬に、目録利用者から任意に15名を選んでインタビューを試みた。

この予備調査の結果を検討して、いくつかの質問を削除もしくは追加し、ワーディングを訂正し、最終的に和文と英文による質問票を作成した（付録参照）。

e) トラフィック調査

インタビューのスケジュールを決めるためのデータを収集する目的で、曜日と時間帯による閲覧目録の利用量の推移を調べるトラフィック (traffic) 調査を実施した。調査期間は5月29日(月)—6月3日(土)の1週間(開館時から閉館時まで)である(第1図)。調査の方法は、閲覧目録エリアの全体を見渡せる場所で、調査スタッフと学生スタッフが、30分単位で目録の延べ利用者数を記録する方法である。その際、日本人と外国人の識別も合せて行

った。

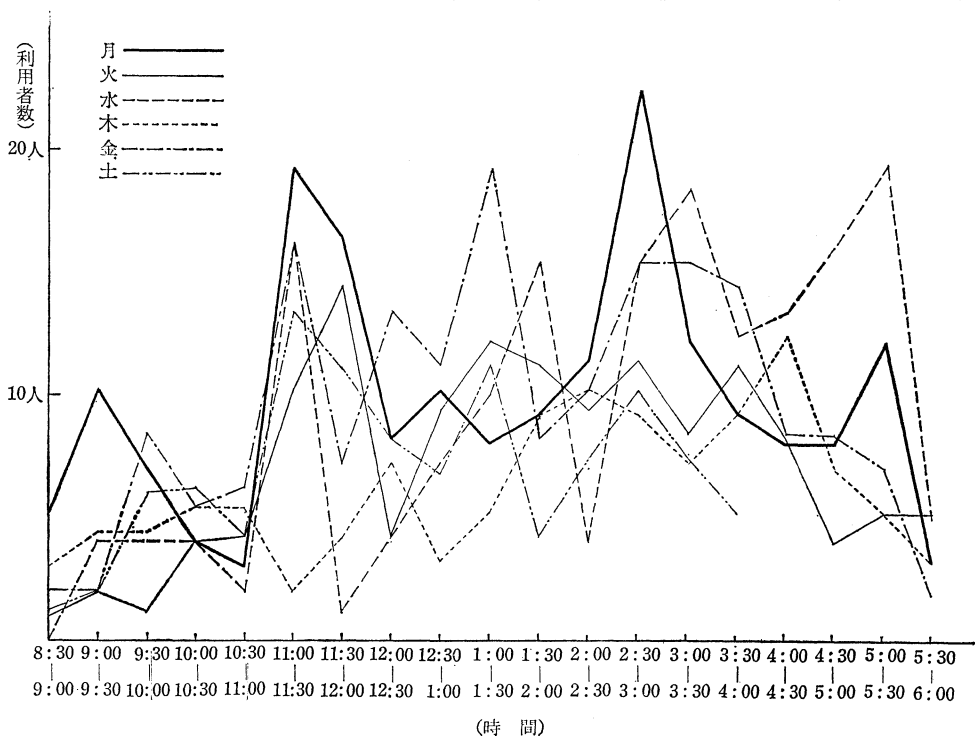
f) インタビュー・スケジュールの決定

原則として、調査スタッフは常時2名を配置し、トラフィック調査の結果から明らかになった利用の多い時間帯には学生スタッフを1-2名補充することにした。インタビュー時間は開館から閉館までを予定した。

g) インタビュアーの訓練

インタビュアー要員のうち、文化人類学専攻の学生スタッフ15名に対してインタビューの訓練を行った。インタビューは質問票に従ってなされるとはいえ、実際には種々様々な探索が予想されるので、インタビューにおいて利用者の意図していた探索の内容を的確に把握し、即座に予め決められている探索タイプに類別しなければならない。そのためには相当の専門知識を必要とされるが、学生スタッフにそれを期待することはできない。そこで、できるだけ正確なインタビューを遂行するために学生の訓練が重要となる。

訓練は2回に分けて行われた。第1回は、質問票およびインタビュー・マニュアル（『質問の意図・注意事項』と『探索タイプふり分け一覧表』）を学生スタッフに配布し、調査の概要を説明した。第2回は、調査スタッフ



第1図 トラフィック調査結果 5月29日(月)—6月3日(土)

国際基督教大学図書館における目録利用行動

2名が利用者となり模擬インタビューの実地訓練を試みた。

h) インタビューの実施

調査スタッフ6名、学生スタッフ15名がスケジュールに従い、目録探索を終了した時点で利用者にインタビューを試みた。質問紙の記入はインタビュアーが行い、特に利用者の持っていた情報（手がかりおよび探している文献の請求番号）については、それらを記憶によっている場合には利用者の覚えている通りに書き留め、記録したものを持っている場合にはそれを書き写した。

また、1人の利用者が複数の既知文献を探索していた場合、あるいは複数の主題についての文献を求めている場合には、最初のひとつの文献あるいはひとつの主題にインタビューを限定した。大部分のインタビューの所要時間は約3～5分であった。

インタビュー調査の実施期間中、常時1名のスタッフが目録利用者のトラフィック調査を1時間単位で、調査前のトラフィック調査と同様の要領で行った。

インタビュー調査の期間中は、調査実施中である旨の案内を図書館入口の掲示板および閲覧目録のカードボックス上に表示し、利用者に協力を要請した。

探索を同時に終了した利用者の数がインタビュアーの数を上回った場合には、インタビューを割愛せざるを得ないケースがみられた。一方、意識的にインタビューを避けたケースは、同一利用者が目録探索後、書架に行きすぐに目録に戻ってきて探索を再開した場合である。これは書架で求めていた文献が見つからずに、また同じ文献の探索を続行しているものと判断し、再度インタビューを試みなかった。また、2日目以後はあまり迷惑をかけないように、既に1度インタビューに応じてくれた利用者はできるだけ避けるように心がけた。

当初、調査期間は開館時より閉館時までを予定していたが、調査の1日、2日目は5時30分でインタビューを中止した。これは5時30分以降、目録利用者の大幅な減少が観察されたからである。更に貸出し手続き終了の5時30分直前におけるインタビューは手続きを急いでいる利用者にとって迷惑であることが、1、2日目の調査で明らかになったため、3日目以後は調査を5時15分で打ち切った。また、1週間の調査期間を4日間に短縮したのは、授業との関係からみて金曜日は月曜、水曜と同様の利用状況であり、したがって、1度インタビューに応じた利用者を避けるとインタビュー対象者が激減すること、および土曜日はトラフィック調査の結果からみて利用者が少ないことが予測されたからである。

i) データの集計

先に実施したアンケート調査は、分類カテゴリー・コードが決まっているいわゆるプリコード調査である。他方、このインタビュー調査は回答結果から分類カテゴリーを構成しなければならない、いわゆるアフター・コード調査である。

カテゴリーを決める前に、調査スタッフが利用者の探索過程を再現し、探していた文献の所蔵の有無、手がかりの信憑性、不成功の原因などを究明する追跡調査を行って、データを整備した。整備されたデータに基づいて探索タイプ別のカテゴリーを構成し、各々のコーディング・シートを作成し、このシートに質問票のデータを転記した。集計は手集計によった。

B. 調査結果

1. インタビュー件数

第1表にみられるように、調査期間中の閲覧目録利用者は561人で、そのうちインタビューのために声をかけたのは307人である。そして、同意を得たのは256人（利

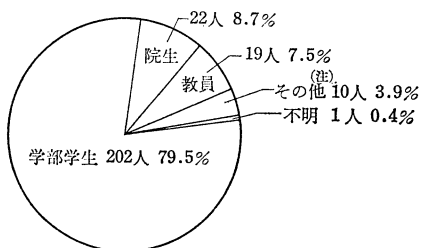
第1表 インタビュー件数

調 査 日 時	A. 目録利用者総数	B. インタビュー総数	$\% \left(\frac{B}{A} \right)$	同 意		拒 否	
				C. 件数	$\% \left(\frac{C}{B} \right)$	D. 件数	$\% \left(\frac{D}{B} \right)$
1978年 6月12日 (8:30-5:30)	169人	110件	65.1	99	90.0	11	10.0
6月13日 (")	118	62	52.5	52	83.9	10	16.1
6月14日 (8:30-5:15)	153	79	51.6	56	70.9	23	29.1
6月15日 (")	121	56	46.3	49	87.5	7	12.5
計	561	307	54.7	256	83.4	51	16.6

用者総数の 45.6%), 拒否は 51 人 (利用者総数の 9.1%) であった。拒否の理由の中で, 最も多かったのは “クラス開始前で時間がない” の 20 件であり, 利用者は総じてインタビューに協力的, 好意的であった。なお, 回答不備, および予め除外することになっていた文学形式を手がかりにした探索各 1 件 (いずれも学部学生) については分析の対象としなかったため, 以下の報告は 254 件を対象にしている。

2. インタビューに同意した利用者の構成

学部学生, 大学院生, 教員の各層別の比率は第 2 図の



第 2 図 利用者の構成

注: その他は年会費を払って図書館を利用している卒業生等である。

通りである。各層の利用者数は各々の在籍者数全体の約 12~13%にあたり, 結果的には各層を平均してインタビューしたことになる。

3. 閲覧目録利用の目的

先に実施したアンケート調査では, 利用者の過去の経験をもとに目録の利用目的を尋ねたのに対して, インタビューでは個々の探索についての目的を尋ねた。その身分別の内訳を示したのが第 2 表と第 3 図である。

1 年生を除く各学年の学部学生においては, “宿題” と “クラス関連読書” を合すると, それぞれ 60% 以上になる。このことから明らかに学部学生の目録利用は, 授業と密接な関係を持っているといえる。これに対して, “サークル活動” と “個人的興味” の合計は 10~18.3% に留まっている。短期間の調査であるため, その結果は ICU 図書館の目録利用者全体の特性を示すものではなく, 従ってアンケート調査の結果と直接比較することはできないが, 学部学生の利用に関して多くの類似傾向がうかがえる。すなわち, 1 年生の利用者は他学年に比べてきわめて少なく, その利用目的は多い順に “個人的興味”, “関連読書”, “宿題” でありアンケート調査の結果と同一順位である。また, 4 年生において, “卒論” が宿

第 2 表 利 用 目 的

(単位 件数)

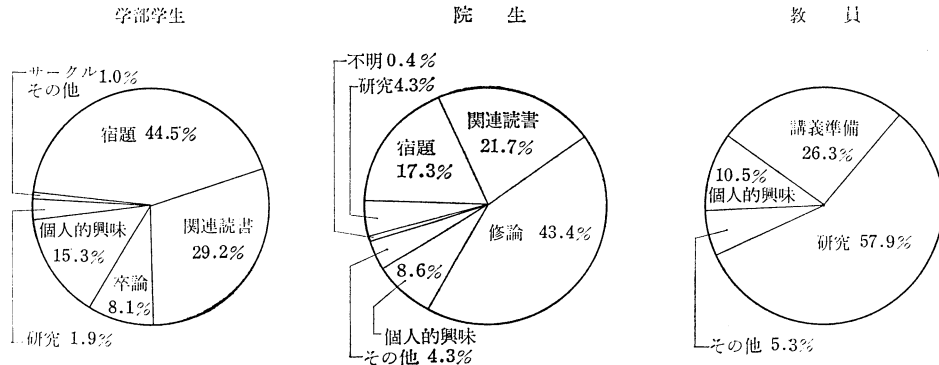
目的	身分	学 部 学 生							院生	教員	その他	不明	合 計
		1 年	2 年	3 年	4 年	選科 ²⁾	編入 ³⁾	研究生					
宿 題		1	26	36	24	3	1	2	93	4	2	1	100
クラス関連読書		4	22	18	14	—	2	1	61	5	2	—	68
卒 論		—	—	—	17	—	—	—	17	—	—	—	17
修 論		—	—	—	—	—	—	—	10	—	1	—	11
サークル活動		—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
個人的興味		6	10	6	7	1	2	—	32	2	2	3	39
講義の準備		—	—	—	—	—	—	—	—	5	1	—	6
研 究		—	1	—	1	2	—	—	4	1	11	—	16
そ の 他		—	—	—	—	—	—	1	1	—	1	4	6
不 明		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
合 計		11	60	60	63	6	5	4	209	23	19	13	265 ¹⁾

注 1) 複数の目的を答えたケースが含まれているので, 合計はインタビュー件数 (256件) を越える。

2) 選科学学生

3) 編入本科学学生

国際基督教大学図書館における目録利用行動



第3図 利用者層別の利用目的

第3表 利用者層別探索タイプ

身分	タイプ	件 数					比 率 (%)				
		既 知	主 題	書 誌	選 択	計	既 知	主 題	書 誌	選 択	計
学 部 学 生		88	97	1	16	202	43.6	48.0	0.5	7.9	100
院 生		15	5	—	2	22	68.2	22.7	—	9.1	〃
教 員		15	4	—	—	19	78.9	21.1	—	—	〃
そ の 他		4	6	—	—	10	40.0	60.0	—	—	〃
不 明		—	1	—	—	1	—	100.0	—	—	〃
計		122	113	1	18	254	48.0	44.5	0.4	7.1	〃

題”に次いで第2位になっているのもアンケートと同傾向である。しかし、1年生以外の学年で“個人的興味”と“関連読書”を目的に挙げた人の比率が、アンケート調査では大体同じであったのに対して、インタビュー調査では“関連読書”の比率が“個人的興味”のその2～3倍になっている。

院生は“宿題”と“関連読書”の合計が“修論”とはほぼ同数となり研究志向がうかがえる。

教員は“研究”が57.8%で“講義準備”26.3%の2倍以上である。“個人的興味”は10.5%で、これは学部学生、院生と大体同率である。

以上のように、閲覧目録の利用について、学部学生（1年生を除く）は授業中心、教員は研究中心、そして院生がその中間に位置するという各層の特性が明確にうかがえる。

4. 探索のタイプ

全探索をタイプ別に集計すると、第3表にみられるように既知文献探索が最も多く、主題探索がこれに次ぐ。そして両者で92.5%に達し書誌的探索と選択的探索の計

7.5%を遙かに凌いでいる。

閲覧目録探索の大部分を既知文献探索と主題探索で占めていることは、エール大学¹⁹⁾、ミシガン大学³⁵⁾の調査において、既知と主題の両者で全探索の90%前後に達しているのと同傾向である。書誌的探索は254件中、1件にすぎなかった。

教員、院生、学部学生別に各探索タイプ間の比率をみると相違が認められる。一般に教員、院生は求める文献について既に知っている場合が多いので所在確認のための既知文献探索の比率が高く、一方、学部学生、特に低学年ほど、特定分野の専門知識や文献について詳しくないので主題探索が多くなるといったパターンが、いくつかの先行調査において確認されている。今回のICU調査においても同様のパターンが認められた。すなわち、教員と院生では既知文献探索の比率が主題探索のそれを大幅に上回っており、反対に学部学生ではわずかであるが主題探索が既知文献探索を上回っている。また、教員、院生、学部学生の順で既知の比率が減少している。

a) 既知文献探索

(1) 探索回数

既知文献を求めるための探索は2回までで、それ以上を試みた利用者はいなかった。そして50件の探索不成功中、手がかりを変更して第2回目の探索をしたのは6件(12%)と極端に減少している。1968—69年実施のミシガン大学の調査³⁶⁾でも2回以上(最高4回)の探索が記録されているが、2回目の探索は1回目の不成功探索の17%に減少している。ミシガン大学調査のように、探索回数を利用者のニーズの強さと忍耐度を表わす指標とみなすならば、今回の調査において、1回目の探索が不成功に終わった大部分の利用者のニーズは弱いものであり、かつ忍耐度も低いということになる。いずれにせよ、閲覧目録の探索にあたっては、求めている文献の目録カードが見つからなかった場合に、手がかりを変更して再度試みるべきであることを、利用者に理解させる必要があるのではなかろうか。

(2) 手がかり

探索以前に利用者の持っていた情報は第4表の通りである。

“著者だけ”とは著者はわかっており、その著者のある著作の内容についても知りながら書名不明、もしくは曖昧という場合であり、また“書名だけ”は主として雑誌、年報、ハンドブック等であった。“その他”とは出版事

第4表 探索文献の情報

手がかり	件数	比率(%)
著者だけ	10	8.2
著者と書名	83	68.0
著者・書名・その他	3	2.5
著者とその他	1	0.8
書名だけ	21	17.2
書名とその他	4	3.3

第5表 第1回アプローチ

手がかり	件数	比率(%)	身 分 別 内 訳		
			学部 学生	院 生	教 員 その他
著者	51	42.1	43 (42.2%)	6	2
書名	57	47.1	50 (49.0)	5	2
件名	2	1.7	2 (2.0)	—	—
不明	11	9.1	7 (6.8)	4	—
計	121	100.0	102 (100.0)	15	4

項の情報や翻訳者(ICU図書館は文学作品の訳者についてだけ副出カードを作成)で手がかりとはならないものであった。

第1回目の探索において、著者名アプローチは42.1%、書名アプローチは47.1%である(第5表)。不明9.1%は記録不備で著者名、書名のいずれを最初の手がかりとしたかわからない場合である。たとえ、これを著者名または書名に加えても両者の差はそれ程大きくならないし、いずれにしてもこの両者が既知文献探索の手がかりの大部分を占めている。

手がかりをエール大学調査¹⁹⁾ほど細分していないので正確な比較はできないが、エール大学の書名アプローチ28.5%にくらべると、ICU図書館は47.1%と高くなっており、相対的に著者名アプローチの比率は低くなっている。しかし、岡田の調査²⁸⁾で“全体的に著者名でさがすケースは少なく書名でさがすことが圧倒的に多い”と述べられていることと、第5表にみられるICUのパターンは異なっている。岡田の調査と出来るだけ同条件で比較し、その傾向をみるために学生層だけを抽出しても、ICU図書館の場合は著者名、書名アプローチは42.2%と49.0%であり、両アプローチの比率は非常に接近している。

件名アプローチは1.7%にすぎず、しかも利用者の探していた文献を図書館が所蔵していなかったために探索の内容を十分に解明できなかったが、その利用者は、文献の内容を知っているが著者名の原綴りと書名がわからなかったケースと思われる。やや特殊な件名アプローチとして次の2つのケースが考えられる。1つは、授業で配られるリーディング・リストに記載されている特定主題に関する複数の文献を特定件名の下で探索すれば、まとまったカード群中に見つけることができ能率的であるため件名アプローチを選ぶものである。もう1つは、著者名、書名アプローチが不成功に終わった場合に第3の手がかりとして件名を使う場合である。後者は今回の調査ではみられなかった。

目録の利用前に著者名と書名の両方を知っていた86件(“著者と書名”83件、“著者・書名・その他”3件)のうち、探索の手がかりとして最初にどちらを選択したかは第6表に示されている。この表によると著者名を選択したのは47.7%、書名を選択したのは38.5%であり、既知文献探索において、利用者は多少、著者名アプローチを好む傾向がうかがえる。因にミシガン大学調査³⁶⁾の結果を紹介すると、著者名と書名の両方を知っている利用者1,051人のうち、著者名を第1の手がかりにしたのは

国際基督教大学図書館における目録利用行動

第6表 手がかりの選択

両方の情報をもちながら 著者名を選択	41件	(著者名アプローチ 51件中)
書名	33件	(書名アプローチ 57件中)
どちらを選択した か不明	12件	(不明11件とその他 1件中)

第7表 文献の情報源 (単位 件数)

	教師の 紹介	図書等 の参考文献 ・注	書誌	書評	以前 目録で	図書 館前	友人・ 同僚	広告・ 書店	その他	不明	計
学部学生	43	18	1	3	2	1	5	4	9	2	88
院 生	6	8	1	—	—	—	—	—	—	—	15
教 員	1	6	2	1	—	1	1	—	2	1	15
そ の 他	2	—	—	—	1	—	—	—	1	—	4
計	52	32	4	4	3	2	6	4	12	3	122

895人(85.2%), 書名を第1の手がかりにしたのは156人(14.8%)であり, 圧倒的に著者名アプローチが多くなっている。

前に述べたように, 最初の探索が不成功に終り, 手がかりを変更して探索を続けたのは6件にすぎなかった。そのうち書名から著者名に手がかりを変更したのは2件, 著者名から書名への変更は3件である。

第7表は, 探している文献をどのようにして知ったのかを示している。学部学生の場合, 探索文献の最も多い情報源は, “教師の紹介(リーディング・リストを含む)”であり, 次いで “図書等の参考文献・注” である。大学院生と教員の場合は, “図書等の参考文献・注” が最も多い。

(3) 探索結果

イ. 成功・不成功

ここでいう探索の成功とは, 探している文献のカードが目録中に見つかった場合に限定する。すなわち, 探索者は特定の文献を求めているので, 文献を手にとって確認したり, 選定したりする必要はなく, 探索時点で成否を決定できる。従って, 目録利用後にその文献を入手できたかどうかは本調査の範囲外である。

第1回探索の121件中, 成功は71件, 不成功は50件であり(第8表), 第2回の探索を試みた6件中, 成功は1件だけである(第9表)。

探索の不成功とは, 目録中に求めている文献のカード

第8表 第1回探索結果

アプローチ	件 数			比 率 (%)	
	計	成 功	不成功	成 功	不成功
著者名アプローチ	51	34	17	66.7	33.3
書 名アプローチ	57	31	26	54.4	45.6
件 名アプローチ	2	—	2	—	100.0
不 明	10	6	4	60.0	40.0
そ の 他	1	—	1	—	100.0
計	121	71	50	58.7	41.3

第9表 第2回探索結果

アプローチの変更	件 数		
	計	成 功	不成功
書名から著者名へ	2	—	2
著者名から書名へ	4	1	3

が見出せなかった場合であるがそれは次の4つに分けることができる。

- 1) 利用者の探している文献を所蔵していないため, そのカードが作成されていない。
- 2) 利用者の探している文献を所蔵しているが, 整理中などの理由で未だカードが作成されていないか, あるいはファイルされていない。
- 3) 利用者の探している文献のカードが目録中にあり, しかも利用者は適切な情報を持っているにもかかわらず, 探索方法が不適切なためカードを見つけない。
- 4) 利用者の探している文献のカードが目録中にあるが, 利用者の情報が間違っていたためカードを見つけない。

以下では, 上記の3)と4)を探索ミスとして扱う。

第10, 11表は今回の調査における主要関心のひとつである不成功の追跡結果を示している。

不成功率は予想に反して高いものであるが, その不成功の内訳をみると, 図書館未所蔵に起因する不成功が64%にもなるのに対し, 探索ミスは30%である。

不成功の原因と利用者の大部分を占める学生の利用目的(授業との密接な関連)とを考えると, 現行の取書方法は利用者(特に学生)のニーズを十分に反映していな

第10表 第1回探索不成功の内訳

アプローチ	件 数			
	計	図書館 未所蔵	整理中	探索ミス
著者名アプローチ	17	13	1	3
書名アプローチ	26	12	2	12
件名アプローチ	2	2	—	—
不 明	4	4	—	—
そ の 他	1	1	—	—
計	50	32	3	15

第11表 第2回探索不成功の内訳

アプローチの変更	件 数		
	計	図書館 未所蔵	探索ミス
書名から著者名へ	2	—	2
著者名から書名へ	3	2	1

第12表 アプローチ別探索結果

アプローチ	件 数		比 率 (%)	
	成 功	探索ミス	成 功	探索ミス
著者名アプローチ	34	5	87.2	12.8
書名アプローチ	32	13	71.1	28.9

注：件数は第1回と第2回の探索を合計したものである。

いのではないかという疑問が生じてくる。

ロ. 探索ミスの分析

著者名と書名のアプローチ別に探索の成功と失敗（つまり探索ミス）を示しているのが第12表である。

一般に既知文献の探索においては、書名アプローチの方が効率的であるといわれているが、それは利用者が正確な情報を持って探索することを前提にしている主張と思われる。しかしながら、実際には、利用者が必ずしも正確な情報を持っているとは限らない。今回の調査で多くみられたように、利用者が記憶による情報を頼りに探索する場合、必ずしも書名アプローチが著者名アプローチより効率的であるとは断定できない。

次に、著者名アプローチの失敗5件と書名アプローチの失敗13件の内容を詳しく検討してみる。

著者名アプローチの失敗は、原綴り不明によるもの3件（例えば、ホイジンガー）、原綴りの誤りによるもの1件（Feuer を Feuer で探したケース）、および外国人の姓名を倒置せず名前を手がかりにしたケース1件である。

書名アプローチの失敗の原因は、次の4つに類別できる。

- 1) 書名の記憶ちがい 8件
- 2) 日本語の分ち書き語順排列 2件
- 3) 日本語のローマ字表記 2件
- 4) 単純な見落とし 1件

以下に書名アプローチ失敗の具体例を挙げる。

(i) 些細な誤りであっても、同一語を含む書名カードが多数あるために探し出せなかったケース。

誤 正

現代の都市政策 → 現代都市政策

経営通論 → 経営学通論

(ii) 書名の記憶違いのためまったく違うカード・ボックスを探したケース。

誤 正

経営行政の哲学 → 行政経営の哲学

Invisible Japan... → Japan's invisible...

(iii) 分ち書きと語順排列が障害となって探し出せなかったケース。

中世の秋（“中世”で区切って探さなかった）

(iv) ローマ字表記が適切でなかったため探し出せなかったケース。

誤 正

Keizairicchi（経済立地） → Keizairitchi

Mass media（マス・メディア） → Masu media

ローマ字表記の問題は、他のタイプの探索においても予想されるものである。

(v) 分出カードが未作成で探索不可能だったケース。

ベン・シラの知恵（聖書外典偽典第2巻所収）

玉篇（四部叢刊所収）

以上の事例で明らかなように、著者名アプローチの場合は、最初の手がかりに綴りや読み方（清濁音の問題、二通り以上の読み方をもつ姓名等）の点で多少誤りがあっても、探索において試行錯誤をくり返し成功に至る可能性が大いと思われるが、書名の場合はこのような試行錯誤の余地は小さく、不正確あるいは誤った書名は直ちに探索の失敗を招きやすい。しかしながら、不正確あるいは不完全な書名でも特定文献を識別するための二次的要素としては有効である。例えば、ある著者の著作で

国際基督教大学図書館における目録利用行動

第13表 不成功後の行動

不成功後の行動	不成功		利用目的内訳						
	件数	比率 (%)	宿題	関連読書	卒論	修論	個人的興味	研究	その他
代りの本をみつける	8	15.1	3	4	—	—	—	1	—
参考図書でしらべる	2	3.8	—	1	1	—	—	—	—
図書館員にたずねる	2	3.8	—	1	—	—	1	—	—
相互貸借を申込み	—	—	—	—	—	—	—	—	—
図書館に購入を希望する	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他の図書館へ行く	10	18.9	1	2	2	2	1	2	—
書店へ行く	2	3.8	1	—	1	—	—	—	—
あきらめる	9	17.0	4	4	—	—	1	—	—
特に決めていない	3	5.6	1	—	—	—	2	—	—
その他	13	24.5	4	1	3	—	1	3	1
不明	4	7.5	2	1	—	—	1	—	—
計	53	100	16	14	7	2	7	6	1

注：複数チェックのため合計数は不成功数より多い。

その内容は知っていながら書名を正確に覚えていない場合に、書名が部分的に間違っている、著者名カード群の中から求める文献を見つけたケースがあった。

翻訳書をさがす場合には、書名アプローチが多かった。これは著者名の原綴り不明が影響していると思われる。また翻訳書名中に、外国語や外国地名が入っているケースが多く、これらのローマ字表記が障害となって探索を困難にしていた。利用者が著者名の正確な原綴りを知っていれば、この場合の探索は容易となる。学生にリーディング・リストを配布したり、文献紹介を行う際に、教師の配慮が望まれる。

(4) 探索不成功後の行動

不成功後の行動は様様ではないが、“その他”を含めると、利用者の約70%には引き続き求める文献を入手するための努力がみられた(第13表)。これらの行動と利用目的との間の関連性には著しい特性は見出せなかった。しかし“あきらめる”、“特に決めていない”といった消極的行動にとどまったものの利用目的をみると“宿題”、“関連読書”、“個人的興味”である。前二者の場合はニーズが強くても提出期限という時間的制約があるためで、後者は必要度がそれ程たかくない等の理由があるのかもしれない。これに反して“他の図書館へ行く”には卒論、修論、研究がその目的に挙げられており、時間をかけても文献の入手に迫られていることが推測できる。ニーズ

がありながら“相互貸借”、“購入希望”がチェックされなかったのは、利用者に時間的余裕がないためか、あるいは図書館側のPR不足で利用者がこの制度を知らなかったことによると考えられる。

不成功後の行動の1つである“その他”13件の内訳は、“教師にきく”、“助手にきく”、“蔵書目録でたしかめる”、“他のアプローチを試みる”、“教師から借りる”の各1件と、“書架に行く”の8件である。この“書架に行く”は、例えば参考図書であることがわかっていることでレファレンス・ルームの該当場所を探してみるとか、探している著作が全集収録と思われるので実際に全集にあたってみる等、書架で探そうとする行動である。これに対して、“代りの本をみつける”8件は、利用者が見つけることのできなかった既知文献を特に必要としていたわけではなく、たまたま知っていた文献を手がかりに探したままで、同一主題に関する他の文献が見つければ、それで間に合うものと考えられるケースであろう。すなわち、この種の探索は、表面的には既知文献探索のかたちをとりながら、潜在的には主題探索に分けることができる。第14表は、既知文献探索と主題探索を表面的と潜在的とに分けたものである。潜在的な探索という観点からみると、既知文献探索の比率が低下し、逆に主題探索のそれが増加するといった傾向は、エール大学調査¹⁹⁾においてもみられる(第15表)。

第14表 探索意図による区分

	表 面 的		潜 在 的	
	件 数	比 率 (%)	件 数	比 率 (%)
既知文献探索	122	48.0	114	44.8
主 題 探 索	113	44.5	121	47.6

第15表 エール大学調査結果

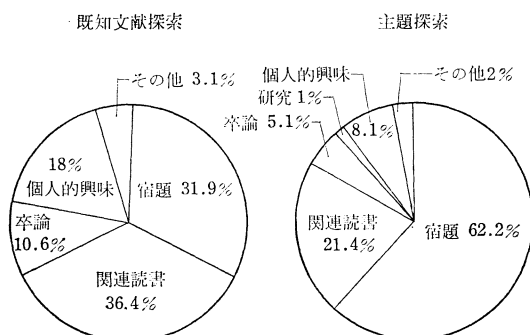
	表 面 的	潜 在 的
既 知 文 献 探 索	73%	56%
主 題 探 索	16	33

第14表は探索不成功後の行動に基づく区分であるが、同様の現象が探索成功例の中にも見られた。しかし、今回は成功例の追跡を行わなかったため、それがどの程度であるかは不明である。

b) 主題探索

主題探索は、特定の主題に関する文献をカード群の中から選定する場合と、特定主題の文献を書架に行き行って選ぶためにその主題の分類番号 (NDC 番号) をカードで調べる場合の2つに大別できる。なお、ICU図書館は全館開架制であり、Library of Congress Subject Headings (以下、LCSH と略す) システムに基づく英語の件名を採用している。

主題探索の85%は学部学生によるものであったが、彼等の利用目的を既知文献探索と比較したのが第4図である。既知では「関連読書」が最も多いが、それ以外の目的を挙げた人も相当数あり利用目的は多岐にわたっている。これに比べて主題探索では「宿題」が62%にも達して、2番目の「読書」との格差が甚だしく、他の目的は殆んど問題にならない。すなわち、レポート作成、ディ



第4図 探索の目的 (学部・学生)

スカッション準備等の「宿題」のために主題探索を必要としており、授業との関連を強く反映しているといえよう。

(1) 主題のタイプ

一般的トピックスは101件、人物関係は12件であった。

(2) 探索語

インタビューでは、利用者の求めている主題について質問し、更に探索の際に手がかりにつかった利用者のコトバを出来るだけ正確に記録するようにつとめた。しかし「アメリカ」をローマ字綴りの「Amerika」或は原綴りの「America」のいずれで探したか、「ルネサンス」をどのようなローマ字表記で探したか不明というケースが2、3生じた。

第16表 探索語の内訳 (単位 件数)

件 名	58 {固 有 名 詞 (16) 一般の件名標目 (42)}
非 件 名	62 {日 本 語 (48) 英 語 (14)}
不 明	1
計	121

探索語を次のように分析した。件名58の中には第16表のように固有名詞16(人名件名12と地名件名4)が含まれているので、一般件名は42となり、主題アプローチ全体の34.7%を占める。件名として採用されていないコトバ(非件名)によって主題探索を行っていたケースの半数以上が、書名あるいは書名の一部と思われるコトバを使用していた。これは一種の書名アプローチと考えることができる。

このような場合に2つのケースが想定できる。ひとつは、件名標目が英語であることを知らずに、日常使用語である日本語のコトバでアプローチする無意識的な非件名による探索である。もうひとつは、必要とする文献は2〜3点で十分であるか、あるいは探している主題の分類番号だけわかればよいという場合において、件名でアプローチするわずらわしさを避ける意識的な探索である。いずれにしても、探索結果のところで詳述するが書名アプローチでは十分な成果を得られないという問題がのこる。

さて、この ICU 調査では、前述のように主題探索の場合に、件名標目を使用せずに一見書名とみえるコトバで探していたケースが多数を占めたことが判明した。一

方、わが国の目録利用調査結果からは、書名アプローチの優位が報告されている。しかし、主題探索の方法としては、分類目録を提供している図書館が多いという現状において、書名アプローチの際に使われる書名が果して特定文献の書名であるのかという確認はされていないし、利用者の本来的な探索意図の追求まではされていないように思われる。このことから、一般的に著者名アプローチより書名アプローチが多いといわれる場合の書名には、特定文献の書名ばかりではなく、主題探索を意図している書名らしきコトバが相当数ふくまれていると解釈できるのではなかろうか。

使用探索語の数は、第17表の通りであるが、探索語を1つだけ用いたケースは83件で、全体の73%を占める。既知文献探索と同様、探している主題についての適切なカードが見つからなかったときに、探索語を変えてカードをひき直すことはほとんどしていない。ミシガン大学調査⁸⁵⁾では、主題探索において1つの探索語しか使用しなかった利用者は、総合図書館で66.0%、学部学生図書館で72.3%、医学図書館で66.8%と報告されている。

第17表 使用した探索語数

探 索 語 数	件 数
1	83
2	17
3	11
4	1
不明	1
計	113

主題の中には、複数の件名を用いなければ適切な探索ができないものがある。例えば、“日本の仏教建築”という主題については、〈Architecture, Buddhist〉と〈Architecture—Japan〉、また“縄文時代の考古学”については、〈Japan—Antiquities〉、〈Excavation (Archaeology)—Japan〉、〈Pottery, Jommon〉等の件名を使う必要がある。このように、件名標目システムを熟知の上で、探索を試みるならば、当然探索語の数は増加しよう。

第18表は、探索語をどのようにして得たのかを調べた結果である。この表によれば、“前から知っている”と“自分で考えた”の2つを合せると80%近くなる。探索語が件名に一致している場合に限定しても同様の結果がみられる。このことは、件名標目の採用にあたっては特

第18表 探索語のソース (単位 件数)

前から知っている	47 (内件名26 但し10は人名)
自分で考えた	40 (“ 22)
LCSH リスト	1 (“ 1)
和英辞書	2 (“ 2 但し1は人名)
クラスで	11 (“ 4)
不 明	9 (“ 3)
そ の 他	1
中 止	2

殊な専門用語よりも慣用語法 (common usage) の語句を選ぶべきであるという Cutter 以来の原則を追認している、といっちは言い過ぎになろうか。

件名と一致している探索語を使用したケースが、全体の34.7%だけであり、しかも閲覧目録の側に置いてあるLCSH リストから件名を探してきたケースはわずか1件であること、また see および see also 参照がほとんど利用されていないことなどから考えて、利用者は件名システムを十分に理解しておらず、適切に使っていないと判断できる。この点については、更に検討を加え、PRや利用指導との関連で何らかの対策を打ち出すべきであろう。

(3) 探索上の諸問題

イ. 人物関係

人物12件中、2件は日本人について、残り10件が外国人であった。日本人は西行法師、大江健三郎で探索上の問題はなかった。外国人の場合に姓と名で探したのは Oates, J.C. だけで残りは姓だけのアプローチであった。それらは、Clark, Gide, Gogh, Hesse, Machiavelli, Milton (2名), Shakespeare であり、Clark と Gide 以外は同姓異人がいないために探索上の問題は生じなかった。(Clark 姓は数人おり、カード枚数も多かったし、求める Clark—所謂クラーク博士—の名は William で同一カード群の後方にあったのにみつかったのは、件名見出し語が赤字でタイプされているためであろう。)人物探索における唯一の不成功ケース(ガンジー)は、原綴りを用いなかったことによるものである。

ロ. 件名標目以外のコトバの使用

探索語のところでふれたように、件名標目以外の日本語または英語で探索するケースが多くみられた。例えば“ゴルフ”をローマナイズして“Gorufu”でカードをさがすと書名カード1枚があり、件名〈Golf〉で引くと数枚の件名カードがある。“バロック音楽”も“Baroque”

という件名以外のコトバでさがしていたが件名〈Music, Baroque〉により多くのカードが集められている。以上の場合、いずれで探索しても分類番号は同一であるので、番号を手がかりにしてその分野の書架のところで文献を選ぶのであれば問題は少ないといえる。しかし“脳”についての文献を探すのに、“No”というコトバと件名〈Brain〉で引いた場合を比較すると、前者の下には書名カード2枚で、どちらも491.37に分類されているのに対して、後者は約100枚の件名カードがあり、分類番号も142.9, 159, 370.8, 460.8, 481.3, 484, 491.17, 491.37, 801.04と多岐にわたっている。このような事実から件名アプローチの方がよりの確で豊富な情報が得られるのは歴然としている。従って、件名アプローチのメリットが利用者に理解されていないのであれば問題は大きいといえよう。ただ利用者のニーズが包括的探索を要せず、2, 3点の文献で充足されるのであるなら、探索主題をあらわす件名以外のコトバを件名代りにつかうことは適切ではないが、ある意味では便宜的方法と考えられよう。

ハ. 件名標目の特定化

探索語の選定にあたって、主題に適合した件名への特定化が十分に行われていなかった(第19表)。

例えば、“臨床心理学”という主題についての文献を求めているケースでは、上位概念を表わす件名〈Psychology〉が用いられ、その件名カード群の最初にくり込まれ

第19表 件名の適合度

完全一致	43件 (内固有名詞 16)
上位概念すぎたもの	5件
他に適当な件名あり	11件

ている see also 参照カードから適切な件名〈Clinical psychology〉に到達していなかった。調査ではこのようなケースが多く認められ、参照カードによって件名を特定化していた探索は極めて少数であった。

また、フランス語の辞書を件名〈French language〉でさがしていたケースでは、連続して排列されているカードをめくることによって、細区分を伴った適切な件名カード〈French language—Dictionaries〉を見つけている。しかし、“ギリシャ悲劇”についての文献を件名でないコトバ“Greek Tragedy”でさがしていた利用者は、カードの排列位置が少し離れていたために、適切な件名〈Greek drama (Tragedy)〉を見つけることができなかった。このようにカードの排列位置も件名特定化におけるひとつの要素かもしれない。

(4) 探索結果

イ. 成功・不成功

主題探索の場合は、求める主題の件名カードが目録中に見つかってもその時点で成功とは即断できない。利用者はその文献の言語や出版年などで適否を判断することであろうし、あるいは書架に行き文献の内容をみなければ適切かどうか決定出来ぬこともある。実際には、求めている主題の分類番号だけを目録で調べて書架に行き、文献を選定するケースが相当数みられた。このような行動の背景には、目録だけで特定文献を決めても、それが貸出中であれば利用できないし、また宿題などのように期限のある場合には図書館ですぐに入手できる文献で間に合せようといった事情があるものと推測される。

今回の調査では、主題探索120件中、特定主題の文献を目録で選定したのは76件、主題の分類番号を調べたのは32件、残り12件は該当するものがなかったケースである。

第20表 探索結果

手がかり	件数	見つかったカードの種類	目録中にカード有り			
			適切図書し	適切図書あり	分類番号け	該当カードし
(1) 件名	54	件名カード	12	26	14	2 ¹⁾
(2) “	4	なし	—	—	—	4
(3) 件名以外の英語	14	件名カード以外	5	5	4	—
(4) 件名以外の日本語	48 ²⁾	“	7	21	14	5

注 1) 件名カードは目録中にあったが、件名の綴りが間違っていたため見つかることができなかったケース1件と単なる見落とし1件である。

2) 不明1件を含む。

国際基督教大学図書館における目録利用行動

第21表 文献の選択基準

選 択 理 由	件 数
つかわれている言語	15
請求番号	4
著者名	7
書名	21
出版年	2
出版者	1
その他	5
不明	1

上述のように、主題の件名カードを見つけることが、必ずしも文献の入手に直結するものではない。文献を入手できたかどうかを判定するためには、利用者が書架で文献をみたあとに再度インタビューする必要がある。しかし、今回はそのような追跡インタビューを行わなかったため、第20表の探索結果は目録探索の終了時点におけるものである。

第20表にみられるように、探索結果は次の4つのケースに類別できる。

(1)は利用者が適切な件名を使用し、しかも図書館が利用者の求めている主題に関する文献を所蔵しており、その件名カードが目録にファイルされているケース。

(2)は利用者の使用件名は適切なものであるが、探している主題に関する文献を図書館が所蔵していないため、件名カードが作られていないケース。

(3)と(4)は利用者が件名以外のコトバ(英語、日本語)を手がかりとしたため、件名カード以外のカードを見出すケース。

ロ. 文献の選定

探索語の下に一群のカードが見つかった場合、次に何を基準にして適切な文献を選び出すかを調べた結果が第21表である。普通、まず言語で文献を選択するものと考えられる。ところが、一番多いのは書名による選択である。これは、書名を見て文献の内容が推測できるためであろう。件名の中には〈Political science〉のように広い領域をカバーしている件名があり、この件名の下には『政治学入門』や『国際政治』といった書名の文献が見出されるので、書名によって適切な文献を絞ってゆくことは、主題探索の有効な戦略のひとつであろう。また、件名を十分に特定化せずに、上位概念の件名で探索するケースが多くみられたが、そのような場合にも選択の基準として書名を多く使うことになる。

参考までに述べれば、ALA調査²⁷⁾では出版年によって適切な文献を選んでいる利用者が最も多い。また、エール大学調査¹⁹⁾ではカードに記載されているすべての項目が選択基準として用いられていると指摘しながらも、件名カードの二次排列を出版年で行うことを提言している。しかし、ICU調査ではPalmerによるミシガン大学調査²⁹⁾と同様、出版年を主題探索における文献選定の第一の基準とみなすことはできなかった。

(5) 探索不成功後の行動

第22表 不成功後の行動

	不成功		利用目的内訳						
	件数	比率(%)	宿題	閲読	連書	卒論	サークル活動	個人的興味	その他不明
書架に行く	10	32.2	4	3	2	1	—	—	—
参考図書でしらべる	2	6.1	2	—	—	—	—	—	—
教師にきく	1	3.2	1	—	—	—	—	—	—
図書館員にきく	—	—	—	—	—	—	—	—	—
友人にきく	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他の図書館へ行く	1	3.2	1	—	—	—	—	—	—
書店へ行く	2	6.5	1	—	—	1	—	—	—
あきらめる	5	16.1	2	1	—	—	2	—	—
特に決めていない	3	9.7	1	1	—	—	1	—	—
その他	5	16.1	2	1	—	—	1	1	1
不明	2	6.5	—	—	—	—	—	—	2
計	31	100	14	6	2	2	4	3	3

前述したように、この場合における不成功は最終的な結果とはいえない。

不成功後の行動は、第22表にみられるように、代りの本を探しに“書架にゆく”が最も多く、“他の図書館に行く”や“書店に行く”が少ないことは、特定文献を求める既知文献探索とは異なる主題探索の特性を反映しているものとみることができる。

(6) 主題探索全般についての考察

以上、事例を挙げながら主題探索のいくつかの側面を検討してきたが、その結果はこの探索の複雑さと難しさを改めて認識させるものであった。主題探索にみられる問題の半分は件名標目自体に内在するものであり、他の半分は件名システムについての利用者側の理解にある。

ここでわれわれは目録利用におけるひとつのジレンマに直面する。すなわち、大学院生や教員に比べて主題知識が乏しく（これはとりもおさず主題分野の用語に精通していないことを意味する）、しかも目録利用経験の浅い学部学生による主題探索が多く、かつそのニーズが強いことである。このジレンマの解決策は、主題に関する探索方法（目録だけでなく、書誌等の二次資料の利用法も含めて）を学部学生が習得できる機会を、特に授業との関連で増やしてゆくことである。

また、4日間という短い調査期間中に、“青年心理”、“少年非行”、“経済地理”、“国際政治”等、同一の主題についての文献を相当数の学生が探していた事実は、明らかに図書館利用と授業との強い関連を物語るものである。このような場合、教員と図書館とが密接な連絡をとり合い、前もって適切な対応ができれば理想的といえる。

c) 書誌的探索

このタイプの探索は、著者名 Heinrich Politzer を手がかりにした *Franz Kafka* の出版者と出版年の調査1件であった。情報源は“教師の紹介”で、その情報は正確であり問題なく目的を達した。

平生、利用者が出版事項、頁数、あるいは著者や書名についての情報等を閲覧目録で調べているのを目撃するが、今回の調査では1件にすぎなかった。学期末や学年末の論文作成期には、書誌的探索が増えるかもしれない。

d) 選択的探索

この探索にはいくつかの手がかりが考えられるが、今回は著者名アプローチ17件と作品名アプローチ1件であった。前者の例としては、図書館が所蔵する特定作家の

著作を確認して、その中から読みたい文献を選んだケースである。後者の例としては、マクベスという作品名を手がかりとして適切な注釈と解説を選んだケースである。

著者名アプローチの内訳は日本人名7件と外国人名10件である。人名件名と同様に、前者は姓名を手がかりに探索されたが、後者は姓だけの手がかりが半数を占めた。日本人名は全部カードが見つかったが、外国人名については、原綴り不明1件、図書館未所蔵1件のカードが見つからず、これにカードは見つかったが適切な文献なしの1件を加えると計3件が探索不成功に終わっている。

見つけたカード群から文献を選択する際に用いた基準は、“書名”5件、“使用言語”3件、“請求番号”、“ノンフィクション”、“注の有無”、“読んだことがあるかどうか”の各1件である。

IV. 結 語

本調査にはいくつかの欠点があることを認めざるを得ない。第一に、調査期間が4日間と短すぎることである。目録利用者全体の特性を究明するためには、厳密な標本抽出による年間を通しての調査が必要である。しかし、實際上、1年間の調査は無理であろうが、せめて1ヶ月ぐらゐの期間が望まれるところである。第二に、インタビューの展開と回答の解釈について、調査スタッフと学生スタッフの間に相違がみられたことである。これは収集データの信頼性にかかわる問題である。そして、第三は、探索タイプの4つの分類が必ずしも適切ではなかったことである。

このような欠点を持っているとはいえ、この調査結果によって、目録を含め図書館サービスと利用者の双方の側におけるいくつかの問題点が明らかになったことは確かである。このような問題点にどのように対処してゆくかは他の関連要素をも考慮しながら検討すべき事柄であろう。また、この調査はICU図書館という特定の環境において実施されたものであり、その結果は他の図書館に直接あてはまるものでないことは指摘するまでもなからう。とはいえ、本調査の方法と結果には、他の図書館にも多少なりとも示唆するところがあると思われる。特に、オンライン・カタログ時代を目録を考える際に、何かの参考になるかも知れない。更に、よりすぐれた方法で、カード目録に限らずその他の形態（冊子体、マイクロフォーム、オンライン）の目録を対象とする調

査が数多く試みられることにより、目録利用に関する実証データが蓄積されることを期待したい。というのは、いかなる図書館ポリシーも実証データの裏付けによって強い説得力を持つからである。

また、視点を変えてみると目録は図書館における文献の入手可能性 (availability) の構成要素のひとつにすぎないといえる。すなわち、文献入手における利用者のフラストレーションには目録の他に収書や貸出方針等のいくつかの要素が影響を及ぼしている。そこで、われわれは次の課題として、ケース・ウェスタン・リザーヴ大学における利用者フラストレーション調査³¹⁾のような目録だけに限定されない総合的な調査を構想している。

付 記

本調査は私立大学図書館協会研究助成金を受けて行った研究の一部である。調査にあたって御協力いただいた戸田慎一氏ならびに国際基督教大学の関係者各位に心から謝意を表する。

- 1) Akers, S. G. "To what extent do the students of the liberal arts colleges use bibliographic items given on the catalogue card?," *Library quarterly*, vol. 1, Oct. 1931, p. 394-408.
- 2) American Library Association. *Catalog use study*. Ed. by V. Mostecky. Chicago, 1958. 86 p.
- 3) 浅賀律夫. "大学図書館における目録利用実態調査—私立大学 8 館のサンプル調査とその分析結果報告," *図書館界*, vol. 24, 1972. 5, p. 23-8.
- 4) 浅賀律夫. "大学図書館における目録利用実態調査—図書館員を対象として," *私立大学図書館協会報*, no. 64, 1975. 5, p. 27-37.
- 5) Aubry, John. "A timing study of the manual searching of catalogs," *Library quarterly*, vol. 42, Oct. 1972, p. 399-415.
- 6) Ayres, F. H. et al. "Author versus title: a comparative survey of the information which the user brings to the library catalogue," *Journal of documentation*, vol. 24, Dec. 1968, p. 266-72.
- 7) Bates, Marcia J. "Factors affecting subject catalog search success," *Journal of American Society for Information Science*, vol. 28, May 1977, p. 161-9.
- 8) Brooks, B. and Kilgour, F. G. "Catalog subject searches in the Yale Medical Library," *College and research libraries*, vol. 25, Nov. 1964, p. 483-7.
- 9) Brown, Margaret C. "The graduate student's use of the subject catalog," *College and research libraries*, vol. 8, Jul. 1947, p. 203-208, 217.
- 10) Cooper, W. S. "The potential usefulness of catalog access points other than author, title and subject," *Journal of the American Society for Information Science*, vol. 21, Mar.-Apr. 1970, p. 112-27.
- 11) Frarey, C. J. "Studies of use of the subject catalog: summary and evaluation," (Tauber, M. F. ed. *Subject analysis of library materials*, New York, School of Library Service, Columbia University, 1953) p. 147-66.
- 12) Hafter, Ruth. "The performance of card catalogs: a review of research," *Library research*, vol. 1, Fall 1979, p. 199-222.
- 13) 藤井千年. "目録へのアプローチの調査—尼崎市立図書館について (1)," *芸亭*, vol. 10, 1970春, p. 30-7.
- 14) Hitchcock, Jennete E. "Objective subjectivity: four year report on starred subject cards," *College and research libraries*, vol. 20, Jan. 1959, p. 9-14.
- 15) 伊藤昭治. "どの目録がよく使われるか—目録利用実態調査," *書燈* (神戸市立図書館報), no. 14, 1967. 7, p. 2-3.
- 16) Knapp, Patricia B. "The subject catalog in the college library: an investigation of terminology," *Library quarterly*, vol. 14, Apr. 1944, p. 108-18.
- 17) Krikelas, James. "Catalog use studies and their implications," (Voigt, M. J. ed. *Advances in librarianship*, vol. 3, New York, Seminar Press, 1973) p. 195-220.
- 18) Lancaster, F. W. *The measurement and evaluation of library services*. Washington, D. C., Information Resources Press, 1977. p. 19-72.
- 19) Lipetz, Ben-Ami. *User requirements in identifying desired works in a large library*. New Haven, Conn., Yale University Library, 1970. ED 042479.
- 20) Lipetz, Ben-Ami. "Catalog use in a large research library," *Library quarterly*, vol. 42, Jan. 1972, p. 129-39.
- 21) Lipetz, Ben-Ami. "The library catalog: evaluation and use studies," (Lancaster, F. W. and Cleverdon, C. W. ed. *Evaluation and scientific management of libraries and information centers*, Leyden, Noordhoff, 1977) p. 13-26.
- 22) Maltby, A. and Sweeney, F. "The U. K. catalogue use survey," *Journal of librarianship*, vol. 4, Jul. 1972, p. 188-204.
- 23) Maltby, A. *U. K. catalogue use survey: a re-*

- port. London, Library Association, 1973. 35 p.
- 24) Markley, A. E. "University of California subject cataloging inquiry: a study of the subject catalog based on interviews with users," *Journal of cataloging and classification*, vol. 6, Fall 1950, p. 88-95.
- 25) Merritt, L. C. *Use of the subject catalog in the University of California Library*. Berkeley, Calif., University of California Press, 1951. 18 p.
- 26) Miller, R. A. "On the use of the card catalog," *Library quarterly*, vol. 12, Jul. 1942, p. 629-37.
- 27) 岡田靖. "大学図書館における目録利用: 予備調査報告," 図書館学会年報, vol. 22, 1976. 5, p. 42-8.
- 28) 岡田靖. "大学における学生の図書館利用に関する調査報告—その 1," 図書館学会年報, vol. 24, 1978. 6, p. 89-96.
- 29) Palmer, R. P. *Computerizing the card catalog in the university library; a survey of user requirements*. Littleton, Colo., Libraries Unlimited Inc., 1972. 141 p.
- 30) Randall, W. M. "The uses of library catalogs: a research project," *Catalogers' and classifiers' yearbook*, No. 2, Chicago, American Library Association, 1931> p. 24-32.
- 31) Saracevic, T., Shaw, W. M. Jr. and Kantor, P. B. "Causes and dynamics of user frustration in an academic library," *College and research libraries*, vol. 38, Jan. 1977, p. 7-18.
- 32) Seymour, C. A. and Schofield, J. L. "Measuring reader failure at the catalogue," *Library resources and technical services*, vol. 17, Wint. 1973, p. 6-24.
- 33) Spalding, C. S. "The use of catalog entries at the Library of Congress," *Journal of cataloging and classification*, vol. 6, Fall 1950, p. 95-100.
- 34) Swanson, Don R. "Requirements study for future catalogs," *Library quarterly*, vol. 42, Jul. 1972, p. 302-15.
- 35) Tagliacozzo, R. and Kochen, M. "Information seeking behavior of catalog users," *Information storage and retrieval*, vol. 6, Dec. 1970, p. 363-81.
- 36) Tagliacozzo, R., Rosenberg, L. and Kochen, M. "Access and recognition: from users' data to catalogue entries," *Journal of documentation*, vol 26, Sept. 1970, p. 230-49.
- 37) University of Chicago. Graduate Library School. *Requirements study for future catalogs*, Progress report No. 2, Chicago, Mar. 1968. 226 p.

国際基督教大学図書館における目録利用行動

(付 録)

質 問 票

面接者：_____ 6月 日 開始時刻 _____：

Q 1 すみません、今この図書館で目録利用調査をしています。少しお伺いしたいことがあります。よろしいでしょうか。3～4分位で終わります。

1 _____ YES

2 _____ NO

Q 2 ここで、インタビューを受けられたことがありますか。

1 _____ YES → これで何回目ですか _____ 回

2 _____ NO

Q 3 今、カードを見ていらっしゃったのは何のためですか。〔表を示して〕この中に該当するものがありますか。

1 _____ クラスの宿題

2 _____ クラスに関係した読書(宿題以外)

3 _____ 卒業論文

4 _____ 修士・博士論文

5 _____ サークル活動

6 _____ 個人的興味

7 _____ 講義するための準備

8 _____ 研 究

9 _____ その他(具体的に教えて下さい)

Q 4 今、探されたものは〔表を示して〕この中のどれに当たりますか。

1 _____ カード目録を使う前に 著者名と書名のわかっていた本

2 _____ " 書名だけわかっていた本

3 _____ " 著者名だけわかっていた本

4 _____ あるテーマ・トピックスについての本

5 _____ ある特定の本についての情報(たとえば、出版社、出版年、etc.)

6 _____ ある手がかり(著者名、シリーズ名等)から読みたい本を探す場合

7 _____ その他(具体的に教えて下さい)

Q 5 a (Q 4 の 1. 2. 3. 5 に対して) お探しになっていた本の著者と書名を教えてくださいませんか。

b (Q 4 の 4 に対して) どんなテーマについての本を探されたのですか。

c (Q 4 の 6 についてはケースに応じて) その著者(あるいはシリーズ等)を教えてくださいませんか。

A. 既知文献探索

A 1 [Q 5 の答えを示し] この本をどこで知りましたか。[表を示し] この中に該当するものがありますか。

- 1 _____ 教師の紹介 (リーディングリストを含む)
- 2 _____ 参考文献や注 (図書・雑誌論文の)
- 3 _____ 参考図書 (事典, 書誌, 索引, 研究入門, etc.)
- 4 _____ 書 評
- 5 _____ 前にカード目録で調べた
- 6 _____ 以前, 図書館で現物を見た
- 7 _____ 友人・同僚から教えてもらった
- 8 _____ 広告・書店
- 9 _____ その他 (具体的に教えて下さい)

A 2 この本は, カード目録で見つかりましたか。

- 1 _____ YES A 3 へ

[Q 5 で著者名と書名の両方を答えた場合, その答えを示し] どれで探されたのですか [と手がかりを確かめて該当するものに下線を引き] 最初からこれで探されたのですか [とたずねる。NO の場合は他の手がかりを使ったかどうかたしかめ Q 5 に使った順序を記入する]

- 2 _____ NO A 4 へ

[同じく, Q 5 で両方答えている場合, その答えを示し] この両方から探してみましたか [と使った手がかりを確かめ, 一方だけの場合は該当するものに下線を引き, 両方の場合には Q 5 に使った順序を記入する]。

A 3 請求番号を教えてください。

Z 1 へ

A 4 [Q 5 の答えを示し] これ以外に, この本について知っていることがありますか。[もしあれば書き留めて] これからも探してみましたか [YES の場合, それに下線を引く]。

A 5 [Q 5 の答え (必要に応じて A 4 の答え) を示し, 問題のありそうな日本語の著者名や書名の読み方およびローマナイズについてたずねる]

A 6 これからどうなさいますか。[表を示し] あなたの考えていられることが, この中にありますか。ひとつ以上でもかまいません。

- 1 _____ 図書館で代りの本を見つける
- 2 _____ 著者名, 書名をもう一度たしかめる (参考図書や参考文献にあたって)
- 3 _____ 図書館員にたずねる
- 4 _____ 相互貸借を申し込む
- 5 _____ 図書館に購入希望を出す
- 6 _____ 他の図書館に行く
- 7 _____ 書店に行く
- 8 _____ あきらめる
- 9 _____ 特に決めていない
- 10 _____ その他 (具体的に教えて下さい)

Z 1 へ

B. 主 題 探 索

B 1 必要な本が見つかりましたか。

- 1 _____ YES
 2 _____ NO

B 2 請求番号を教えてください。

B 3 この本をどんな言葉の下で見つけたのですか。〔Q 5－b で件名および件名らしい言葉を挙げた場合は、その言葉を示し〕この言葉の下で見つけたのですか〔言葉をいくつも挙げた場合は番号をつける〕。

- 1 _____
 2 _____
 3 _____

B 4 〔B 3 の言葉を示し〕最初からこの言葉で探していたのですか。

- 1 _____ YES 〔表を示してその言葉のソースをたずねる〕
 2 _____ NO

↓
 それでは最初どんな言葉で探したのですか

〔表を示して最初の言葉のソースをたずねる〕

↓
 〔最初の言葉から B 3 の言葉にどのようにしてたどりついたか、具体的プロセスをたずねる〕

表

- 1 _____ 前から知っていた
 2 _____ 自分で考えた
 3 _____ カードをめくっている時にみつかった
 4 _____ See, See also カードによって
 5 _____ L.C. Subject Headings によって
 6 _____ 和英辞書をみて
 7 _____ 参考図書（事典、書誌、索引、etc.）
 8 _____ クラスで
 9 _____ その他（具体的に教えてください）

B 5 〔B 3 の言葉を示し〕見つけた本は この言葉の下にあった本の一部ですか、全部ですか 〔B 3 の言葉がいくつもある場合、該当する欄に各言葉の番号を記入する〕。

- 1 _____ 一部
 2 _____ 全部

B 6 〔表を示し〕カードの何を見て、この本を選ばれたのですか 〔ひとつ以上チェックしてかまいません〕。

- 1 _____ つかわれている言語
 2 _____ 請求番号（コールナンバー）
 3 _____ 著者・編者・団体名等
 4 _____ 書 名
 5 _____ 叢書名
 6 _____ 版 次
 7 _____ 出版年
 8 _____ 出版者
 9 _____ その他（具体的に教えてください）

B 7 [Q 5 の答えを示し] このテーマについての本を探すのに、どんな言葉を使われましたか。使った言葉を全部教えて下さい [言葉がいくつもある場合、番号をつける]。

- 1 _____
- 2 _____
- 3 _____

B 8 [B 7 の言葉を示し] この言葉をどのようにして知ったのですか。[表を示し] この中に該当するものがありますか [B 7 の言葉がいくつもある場合、該当する欄に各々の番号を記入]。

- 1 _____ 前から知っている
- 2 _____ 自分で考えた
- 3 _____ カードをめくっている時にみつけた
- 4 _____ See, See also のカードによって
- 5 _____ L.C. Subject Headings によって
- 6 _____ 和英辞書をみて
- 7 _____ 参考図書 (事典, 書誌, 索引, etc.)
- 8 _____ クラスで
- 9 _____ その他 (具体的に教えて下さい)

B 9 [B 7 の言葉を示し] この言葉はカード目録で見つかりましたか。

- 1 _____ YES [B 7 の言葉がいくつもある場合、その中にひとつでも YES があれば]→ B10へ
- 2 _____ NO [B 7 の言葉がいくつもある場合、すべて NO であれば]→ B11へ

B10 [B 9 で YES と答えた言葉を示し] この言葉の下にあった本が適切でないと判断したのはどうしてですか。[表を示し] この中に該当する理由がありますか。[ひとつ以上チェックしてかまいません]

- 1 _____ つかわれている言語
- 2 _____ 請求番号 (コールナンバー)
- 3 _____ 著者・編者・団体名等
- 4 _____ 書 名
- 5 _____ 叢書名
- 6 _____ 版 次
- 7 _____ 出版年
- 8 _____ 出版者
- 9 _____ その他 (具体的に教えて下さい)

B11 これからどうなさいますか。[表を示し] あなたの考えていられることが、この中にありますか。ひとつ以上でもかまいません。

- 1 _____ 書架に行く (をみる)
- 2 _____ 参考図書 (書誌, 索引, etc.) をしらべる
- 3 _____ 教師にたずねる
- 4 _____ 図書館員にたずねる
- 5 _____ 友人, 同僚にたずねる
- 6 _____ 他の図書館に行く
- 7 _____ 書店に行く
- 8 _____ あきらめる
- 9 _____ 特に決めていない
- 10 _____ その他 (具体的に教えて下さい)

Z1へ

C. 書 誌 的 探 索

C 1 [Q 5の答えを示し] この本をどのようにしてお知りになりましたか。〔表を示し〕 この中に該当するものがありますか。

- 1 _____ 教師の紹介（リーディングリストを含む）
- 2 _____ 参考文献や注（図書・雑誌論文の）
- 3 _____ 参考図書（事典，書誌，索引，研究入門，etc.）
- 4 _____ 書 評
- 5 _____ 前にカード目録でしらべた
- 6 _____ 以前，図書館で現物を見た
- 7 _____ 友人，同僚から聞いた
- 8 _____ 広告，書店
- 9 _____ その他（具体的に教えて下さい）

C 2 [Q 5の答えを示し] この本は見つかりましたか。

- 1 _____ YES C 3へ

〔Q 5で著者名と書名の両方を答えた場合，その答えを示し〕 どれで探されたのですか〔と手がかりを確かめて該当するものに下線を引き〕 最初からこれで探されたのですか〔とたずねる。NO の場合は他の手がかりを使ったかどうかたしかめ，Q 5に使った順序を記入する〕。

- 2 _____ NO C 4へ

〔同じく，Q 5で両方答えている場合，その答えを示し〕 この両方から探してみましたか〔と使った手がかりを確かめ，一方だけの場合は該当するものに下線を引き，両方の場合には，Q 5に使った順序を記入する〕。

C 3 [Q 5の答えを示し] この本について，カードで何を確かめられたのですか。〔表を示し〕 この中に該当するものがありますか。

- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1 _____ 著者名 | 7 _____ 版 次 |
| 2 _____ 著者の生没年 | 8 _____ 出版地 |
| 3 _____ 共著者名 | 9 _____ 出版者 |
| 4 _____ 編者名 | 10 _____ 出版年 |
| 5 _____ 翻訳者名 | 11 _____ ページ数 |
| 6 _____ 書 名 | 12 _____ その他（具体的に教えて下さい） |

Z 1へ

C 4 [Q 5の答えを示し] この本についてこれ以外に御存知のことがありますか。

〔もしあれば〕 これからも探してみましたか〔YES の場合，それに下線をひく〕。

C 5 [Q 5の答え(必要に応じてC 4の答え)を示し，問題のありそうな日本語の著者名や書名の読み方およびローマナイズについてたずねる。]

C 6 これからどうなさいますか。〔表を示して〕 この中に該当するものがありますか。

- 1 _____ 参考図書（書誌，索引，蔵書目録，出版年鑑，etc.）でしらべる
- 2 _____ 図書館員にたずねる
- 3 _____ 他の図書館でしらべる
- 4 _____ 友人，同僚にたずねる
- 5 _____ あきらめる
- 6 _____ 特に決めていない
- 7 _____ その他（具体的に教えて下さい）

Z 1へ

D. 選 択 的 探 索

D 1 [Q 5 の答えを示し] この著者(シリーズ)はどのようにしてお知りになったのですか。[表を示し] この中に該当するものがありますか。

- 1 _____ 教師の紹介(リーディングリスト含む)
- 2 _____ 参考文献や注(図書・雑誌論文の)
- 3 _____ 本や雑誌に出ていた
- 4 _____ 参考図書(事典, 書誌, 索引, 研究入門 etc.)
- 5 _____ 書 評
- 6 _____ 以前, 図書館でこの著者(シリーズ)の本を読んだことがある
- 7 _____ 前にカード目録で調べた
- 8 _____ 友人, 同僚から聞いた
- 9 _____ 広告, 書店
- 10 _____ その他(具体的に教えて下さい)

D 2 [Q 5 の答えを示し] この著者(シリーズ)のカードがみつかりましたか。

- 1 _____ YES D 3 へ
- 2 _____ NO D 7 へ

D 3 [Q 5 の答えを示し] この著者(シリーズ)の下にお読みにになりたい本がありましたか。

- 1 _____ YES _____ 冊 D 4 へ
- 2 _____ NO D 6 へ

D 4 これは図書館にあったものの一部ですか。

- 1 _____ YES D 5 へ
- 2 _____ NO Z 1 へ

D 5 この本はどのような判断で選ばれたのですか, その理由がこの中にありますか。

- 1 _____ つかわれている言語
- 2 _____ 著者名
- 3 _____ 書 名
- 4 _____ 版次, 出版年
- 5 _____ 請求番号(コールナンバー)
- 6 _____ その他(具体的に教えて下さい)

Z 1 へ

D 6 どんな理由で読みたい本がないと判断したのですか, その理由がこの中にありますか。

- 1 _____ つかわれている言語
- 2 _____ 著者名
- 3 _____ 書 名
- 4 _____ 版次, 出版年
- 5 _____ 請求番号(コールナンバー)
- 6 _____ その他(具体的に教えて下さい)

Z 1 へ

国際基督教大学図書館における目録利用行動

D7 [Q5で答えた日本語の著者(シリーズ)に関して、利用者の間違えそうな読み方やローマナイズについてたずねる]

D8 これからどうなさいますか。〔表を示し〕この中に該当するものがありますか。

- 1 _____ 書店に行く
- 2 _____ 友人、同僚にこの著者(シリーズ)の本を持っていないか聞く
- 3 _____ 図書館員にたずねる
- 4 _____ 他の図書館に行く
- 5 _____ あきらめる
- 6 _____ 特に決めていない
- 7 _____ その他(具体的に教えて下さい)

Z1へ

一 般 質 問

Z1 ふだんの程度図書館を利用していますか。

- 1 _____ 毎 日
- 2 _____ 週3～4回
- 3 _____ 週1～2回
- 4 _____ 月2～3回
- 5 _____ 月1回以下

Z2 ふだんの程度カード目録を利用していますか。

- 1 _____ 毎 日
- 2 _____ 週3～4回
- 3 _____ 週1～2回
- 4 _____ 月2～3回
- 5 _____ 月1回以下

Z3 ICU 図書館のカード目録についてどのような印象を持っていますか。

- 1 _____ 利用しやすい フェースシートへ
- 2 _____ 全体としては利用しやすいが利用しにくいところもある
- 3 _____ 利用しにくい } Z4へ
- 4 _____ 何ともいえない フェースシートへ

Z4 カード目録の利用しにくい理由は何ですか(ひとつ以上チェックしても構いません)。

- 1 _____ カードがどのように並んでいるのかわからない
- 2 _____ 日本語と外国語のカードが一緒にまざっている
- 3 _____ 著者名カード、書名カード、「テーマ・トピックス」のカードがまざっている
- 4 _____ 「テーマ・トピックス」で探すときの言葉が英語である
- 5 _____ 日本語のローマナイズがよくわからない
- 6 _____ 外国人名の綴りがわからない
- 7 _____ 外国語のカードは何が書かれているのかわからない
- 8 _____ その他(理由を具体的に教えて下さい)

フ ェ ース シ ー ト

該当する欄をチェックして下さい。

I 学部学生・大学院生

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(1) 学 年	Fr.	So.	Jr.	Sr.	OYR	Trans.	研究生	Gr.	Gr. Sp.	その他

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(2) 専攻学科	H	SS	NS	L	Ed	Id	GSE	GSPA	GSCC	その他

II 教員・助手

	1	2	3
(1) 勤続年数	1年未満	1～5年未満	5年以上

	1	2	3	4	5	6
(2) 専攻分野	H	SS	NS	L	Ed	その他

このカード目録について御気付きの点、御意見、御要望があればお聞かせ下さい。

日常使用語

1	2	3	4	5	性別 1 2
日本語	英 語	韓国語	中国語	その他	M F

終了時刻

: